

# 29pmE-080

調剤薬局調剤室における医薬品による室内環境汚染

○村橋 毅<sup>1</sup>, 伊藤 貴信<sup>1</sup>, 大津 亜紀子<sup>1</sup>, 小宮山 拓実<sup>1</sup>, 橋沼 亨<sup>1</sup>, 樋口 敏幸<sup>1</sup>, 北村 繁幸<sup>1</sup>(<sup>1</sup>日本薬大)

【目的】調剤薬局での業務として多種多様な医薬品の散剤調剤や錠剤粉砕等がある。それらは日常的に行われており、その粉塵が空気中に飛散していると考えられるが、その対策が十分に行われていない薬局も少なくない。このことにより、散剤アレルギーが誘発される可能性もあり、医薬品の曝露による作業者及び周辺の者への健康被害が懸念されている。今回、実際の調剤薬局で、室内大気中の粉塵を採取し、医薬品の測定を行ったので報告する。

【方法】エアサンプラーで調剤室における粉塵を採取し、HPLC を使用して目的薬剤の濃度を測定した。定量した医薬品は当該薬局において、使用量が多い散剤の中からチペピジンヒベンズ酸塩を選んだ。測定条件は JP15 に従った。

【結果・考察】調査した薬局の室内空気のチペピジンヒベンズ酸塩は  $0.23 \mu\text{g}/\text{m}^3$  であった。成人の呼吸量を  $0.5 \text{ m}^3/\text{h}$  とすると、1日(8時間)の労働では  $0.92 \mu\text{g}$  のチペピジンヒベンズ酸塩は吸入したと予想される。この量では薬効や副作用を示すとは考えにくいですが、薬剤の種類によっては薬剤性アレルギーを引き起こす可能性は十分にある。今後、更なる調査と曝露を予防する対策が求められる。